群馬県高等学校教育研究会音楽部会「令和元年度第２回授業研究会」

日　　時　　令和元年　１月２２日（水）
会　　場　　群馬県立桐生女子高等学校
教科・科目　　芸術科・音楽Ⅰ
題　材　名　　リコーダーの響きを味わおう
指 導 学 級　　普通科　１年１組　音楽選択者
授　業　者　　青柳　亮　教諭

１　開会行事

（1）挨拶

①大熊　信彦　先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会長）

授業研究会、講演会の開催に当たり、西村校長先生をはじめ、桐生女子高校の関係の方々に深くお礼を申し上げる。研究授業を行っていただく青柳先生には、授業準備などを含めて大変お世話になる。また、県教育委員会島田指導主事にはお忙しい中ご参加頂いた。指導助言をよろしくお願いいたします。今年は真夏の日本に１万人を超えるオリンピックの選手が２００の国や地域から、パラリンピックにも４、０００人を超える選手が集まってくる。世界に目を向けてみると、国同士の国際協調の枠組みや、多様性・人権などといった価値観が、色々と揺らいでいるようにも思う。東京オリンピックは、日本から世界に向けて秩序の維持と、平和の尊さはもちろん、世界の多様性と協調性を発信するチャンスだと思う。なぜこのような話をしたのかというと、音楽教育は、人の心に直接訴える音を通して、世界の様々な音楽文化や、その背景などを体験的に知ることができる、まさに、多様性と調和の大切さを、学習を通して実感できるものだと考えているからである。今日の青柳先生の授業は、１７世紀オランダのエイクの作品を、生徒が西洋楽器であるリコーダーで奏でるという内容であり、拝見できることをとても楽しみにしている。

ご紹介が遅くなったが、今日は静岡大学の名誉教授でいらっしゃる北山敦康先生にお越しいただいた。現在の学習指導要領と、新しい学習指導要領、両方の作成に学識経験者として参加されていらっしゃり、午前の授業研究会、午後の講演会、１日を通してご指導をいただけることになっている。何卒よろしくお願いいたします。今日の研究会が、参加された先生方にとって有意義なものになることを願い、挨拶とさせていただきます。

②西村　琢巳　先生（群馬県立桐生女子高等学校校長）

本日は桐生女子高校にお越しいただき、ありがとうございます。本校は令和３年から、桐生高校と統合するということで準備を進めているところである。桐生女子高校は創立１１３年で終わりになり、県下では２番目の長さの女子高校であった。さみしい面もあるが、新しい学校で、職員・生徒が頑張っていこうというところである。

さて、音楽の先生は学校に１人ということで、交流する機会が少ないと思う。こういった交流会がないと、他校の音楽の先生方と話もできないし、授業はどのようにするのだろうという情報交換ができないので、学校で１人というのはさみしいのではないかと思っている。今回を交流の場にしていただき、より一層音楽の授業研究、授業の技術向上に努めていただければと思う。

音楽・体育の授業は、５教科の授業とは違うという先生がいるが、私は、逆に音楽・体育などがないと生徒は育たないと、信念として思っている。例えば、超進学校と呼ばれる私立の学校などでは、音楽Ⅲ、美術Ⅲまで授業が行われている。是非とも学びを重ねてほしいなと考えている。

③島田　聡　先生（群馬県教育委員会高校教育課指導主事）

年度末や新年度に向けて慌ただしいなか、多くの先生方の参加により第２回授業研究会と部会講演会が開催され、音楽部会の先生方が計画的・継続的に授業改善に御尽力いただくと同時に、その基礎となる高等学校学習指導要領の理解に努めていただいていることに、県教育委員会を代表して感謝申し上げる。

本日は、桐生女子高校を終日お借りし、授業研究会においては、「音楽Ⅰ」における器楽の授業を拝見させていただく。開催に当たり御理解・御協力をいただいた西村校長先生をはじめ、授業者の青柳先生、生徒の皆さんに感謝申し上げる。江戸時代に「西の西陣・東の桐生」と言われこともあり、桐生の地は芸術・文化に理解の深い産業の地であると思う。その地の生徒の皆さんが、どう芸術に向き合い学びを深めているかについて、青柳先生の授業を通して考える良い機会だと思っている。

部会講演会においては、２度にわたり高等学校学習指導要領の改訂に携わった北山敦康先生からお話を伺う。新高等学校学習指導要領の実施に向け、部会全体の大きな財産となると考える。

先生方にとって、充実した一日となることを御祈念申し上げ、挨拶とさせていただく。

（2）授業説明（青柳教諭）

本番は緊張しないタイプだと思っていたが、だんだんと緊張してきている。「リコーダーの響きを味わおう」という題材で授業をするが、リコーダーに関しては、楽しんで取り組む様子は見受けられるものの、運指の思い出しから始めることも多い。リコーダーの良さを伝え、音色にもっと耳を傾けてみようということを主に授業を進めたい。

本日扱うのはエイク作曲の「涙のパヴァーヌ」という曲で、リコーダーの良さや、響きについていっしょに考えてみたいと思い、設定した。これまでには「フレールジャック」という曲を通じてタンギングの種類について考えた。タンギングを「トゥー」や「ドゥー」、「ルー」という文字に表し、それぞれのタンギングをあてはめて、曲に合ったタンギングできれいに吹いてみようという活動を先週行った。「涙のパヴァーヌ」は本時初めて扱うため、生徒の気づきを大切に、ビブラート奏法について考えられたらと思う。

指導案にはいろいろ描いてはみたものの、生徒にどういう投げかけをするのかなど、普段の授業に還元できるよう、様々な視点から先生方に教えていただければと思う。よろしくお願いいたします。

（3）授業研究係より

前回に引き続き、今回も「授業研究の視点」を踏まえ、参観していただき、授業研究では各班でその視点に沿って協議を行ってほしい。

「授業研究の視点」

共通	本時における学習内容は、「新高等学校学習指導要領」におけるどの「指導事項」と関連するか
選択	１　本時の学習目標を達成することで、どんな「育成を目指す資質・能力」が身に付くか
	２　本時の展開で、「主体的・対話的で深い学び」となっていた場面はどこか

２　研究授業　　学習指導案参照

３　授業研究

（1）授業者より趣旨説明等（青柳教諭）

時間配分が遅め遅めになってしまったという感じがあるが、前時までの演奏面における練習が行き届いていなかったので、少し時間をかけた。生徒は緊張していなかったようで、恥ずかしがらずに取り組んでくれたと思う。ワークシートはよく書ける生徒たちだと思っているので、生徒自身の気づきをポイントに置いた。

既習事項のタンギングについて今回の学習に生かしたかったが、時間があまりかけられなかったので、トゥーという発音で柔らかく発音してみようということのみとりあげた。

ビブラートに関しては、一つの奏法としてこういったものもあるんだよ、と紹介するようなコンセプトでいきたいと考えている。何がなんでもあのように音を揺らして演奏するということではなく、ビブラートをかけることでどんな効果があるのか、考えさせたい。生徒の意見の吸い上げ方や、生徒の気づきをどううまく次の活動につなげていけるかなど、勉強しなければと思っているので、是非、みなさん忌憚のないご意見をお願いしたい。リコーダーの音色がもつ雰囲気や、奏法によって曲想や音色が暗くなったり優しくなったり寂しそうになったりということを味わわせることができたらと、今日の１時間を経て思った。

（2）研究協議

○グループ協議及び発表

１班：川上（玉村）、黒岩（高崎）、近野（伊勢崎清明）、引田（市立太田）

・授業の雰囲気が穏やかでしっとりしていて、学習に向かいやすい授業作りがされていた。生徒の声を拾い上げようとする穏やかな態度や柔らかな言葉遣いにより、いいテンポで進んでいた。
・女子ならではの気づきや言葉の表現がよかった。生徒は素直で真面目に学習に向き合っていた。
・リコーダーの表現について、3つの種類のタンギング（T、D、R）と、ビブラートへの着目がよかった。
・小中学校で学習したリコーダーを、なぜあえて高校で取り上げるのか、どのように生徒に動機付けさせているかが知りたい。選曲について、もっと生徒が興味をもちやすい曲（ポップスなど）をリコーダーで演奏したものを鑑賞させて、リコーダー特有の音色や表現力に気づかせるのはどうか。リコーダーを吹きたいと思わせるアプローチがもっとみえるとよかった。
・今回はＣＤを聞いて、その音、演奏に近づけるということが授業の到達点となっていたように思う。ビブラートの扱いを広げても良かったのでは。
　参考音源はビブラートがついていた→ビブラートってなんだっけ？→なんでビブラートをつけるの？
　というように、表現の根本に焦点を当てても良い。
・ビブラートありなしで聞き比べを行うなど。
・楽譜を見て演奏後、ＣＤを聴く、というやり方もあるのでは。ＣＤと同じように吹きたい、ではなく、こういう演奏をしたい、というようになっても良かったのでは。

（青柳先生より）

・リコーダーがすごい楽器だ！と思って高校に来る子は少ないのかもしれない。演奏した思い出や苦労した思い出がある生徒は多いと思う。小中でリコーダーを終わらせてしまうのはもったいないと感じている。
・アンサンブルよりも独奏によって世界が広がるようにしたく、今回の教材を選んだ。

２班：金田（前橋女子）、鈴木（桐生南）、橋詰（太田女子）、五十嵐（長野原）、田中（高高特支）

・暖かい雰囲気で授業されていた。生徒が活発に活動し、教師が思う方向に上手に引っ張っていたと思う。
・教師が指示や説明をし、それを聞いてすぐにリコーダーで試して練習をするという手軽さが良かった。教師が

話をする部分と実際に演奏してみる部分とのバランスがとても良かった。
・生徒の能力が高く、楽譜を配ったら見てすぐ演奏できるという子が多いため、そういった生徒の実態を踏まえた実践内容であったように思う。
・教師と生徒間、また生徒の中だけでも良い関係性が築かれており、グループ活動でも話が膨らみ楽しそうに活動していたのが印象的だった。生徒はＷＳなどもとてもよく書けていた。それだけに、「タンギングはＲｕを多めに使ってみよう」「全部の音にビブラートはかけないでみよう」と全体に投げかけて引っ張るのではなく、「自分なりにこうやってみたい」と思う生徒を伸ばすことができる過程があっても良かった。
・ビブラート＝良いものという感じがした。生徒の思考判断に沿っていたのかどうかが気になる。
・ビブラートをつけることが大事なわけではなく、どうつけたら良いかを判断することができるようにしたい。
・ビブラートを演奏するのであれば、曲を演奏することではなく、ビブラートに焦点を当てられるのではないか。
・リコーダーについて考えることができて良かった。
・題材の指導目標には「他者との調和を意識しながら」の創意工夫とされている。本時ではそれを意識させる場面ではなかったのかもしれないが、奏法としてのビブラートを個人で習得した後、アンサンブルをした際に、ビブラートが「調和」の妨げになることは考えられないだろうか。ここからどのように「他者との調和」に繋がるか興味がある。
・生徒がとてもよく活動できているので、生徒の気付きを上手く拾い上げたい。参考演奏を聴かせた際に、「歌っているような感じ」と書いている生徒がいたので、その気付きからビブラートに繋げることも可能なのではないか。自分がもし授業で取り扱うならば、ビブラート有の演奏と無の演奏を比較させ、必要性に迫らせたり、どのようにつけるか検討させたりしてもいいなと思う。
・【ビブラートによる音色を知覚→それがどういう働きをしているかを感受→自分で工夫して表現】という過程で、感受の部分が抜け落ちてしまっているところがあるのではないか。自分が表現したいことに近付けるための手段がビブラートという奏法であり、その働きを自身で感受した上で使えるようになるといいと思った。

３班：兒玉（高崎女子）、勝山（前橋商業）、伴野（県教委）、坂本（県教委）

・ビブラートができている生徒への声かけをもっと生かせると良かった。
・ＣＤに傾聴し、どうやったらできるのか、やってみたい、という思いが強く、主体的に取り組めていた。
・曲想の理由を探っていくことによって、奏法の工夫に結びつくのでは。
・「涙のパヴァーヌ」が作られた当時の時代を考えると、今日の授業で取り上げることは別として、ビブラートをかける特徴や習慣があったのかということが気になった。
・ビブラートは奏法・生徒の演奏面での引き出しを増やすという意味合いで、演奏に幅を持たせるきっかけとなる内容だったのではないかと思う。
・青柳先生の投げかけが、生徒の気づきに結びついている場面がよかった。例えば「タンギングの違いだけでこの演奏になるかな」「音が伸びている部分はどうなっているかな」という投げかけなど。
・今日のポイントは、タンギングやビブラートをするための息の入れ方だったのではないかと感じた。
・ビブラートを取り上げたあたりから、生徒のやってみたいという気持ちが大きくなり、どうやったらできるようになるかというのを生徒自身が考えている部分が、主体的・対話的な学びにつながっていると感じた。

４班：小川（利根商業）、前島（館林）、柳田（館高特支）、住谷（高崎特支）

・授業者の人柄によって優しい雰囲気の授業であった。
・グループ内でビブラートをどのようにつけるのかを試行錯誤する姿が見られた。実際にリコーダーで試してい

て、ビブラートについて探っていく中で「お腹で」などの良い意見が出ていた。
・先生と生徒のやりとりがあまり見られなかった。生徒の発言に対してのコメントを適切にしていくことで、深い学びにつなげる。
・グループ内での意見共有をしたあと、他のグループとの共有も大事。
・歌わせたあとにリコーダーを演奏させた場面が良かった。
・ＣＤは１曲を通して聴き、演奏をする部分が全体の中でどのような部分であるかを確認した方が良いのでは。
・全体を通して、生徒の気付きを中心に展開されていたことが良かった。

５班：木部（太フレ）、大小原（高高特支）、須田（吉井）、松平（尾瀬）
・生徒達で意見交換や対話はできていたが、まだ入り口の段階で深い学びはこれからという感じがした。
・曲に対して、似たような意見だけではなく、異なる意見も出すことによって深い学びになるのでは。期待と反する意見や感想をどのように拾い上げ展開させていくか、例えば、なぜそのように感じたのかを曲や音楽の要素から考えていくなどが深い学びにつながっていくと思う。
・曲のフレーズや盛り上がりなども意識し、技術だけに集中しないようにできると深い学びになるのではないか。
・ビブラートありきで進んでいた感じがした。ビブラートよりも曲のフレーズや歌い方などを共有して、そこからのビブラートにつなげる方が良かったのでは。
・タンギングについて、３種類の使い分けが曖昧な生徒がいて、共通した解釈を周知した方が良かった。
・せっかくフレーズを歌唱したのだから、歌唱からビブラートの気付きを導き出せると良かった。また、その際にどの音にどのようにつけるかを波線などで書き込めると学びにつながったのではないか。
・生徒同士で演奏を聴くにも、まだお互いが聴き合えるところまで技術が追いついていない。運指から演奏技術をしっかりと獲得させる方が先だと感じた。
・今回はまだ導入の部分で、これから「涙のパヴァーヌ」への解釈が深まっていく段階なので、今後どのように生徒達の表見が変化していくかを見てみたかった。

〇授業者より
先生方のおっしゃる通りで、ビブラートありきということに確かに自分も特化してしまった。終わってみて、どのように生徒の意見を拾い上げるかというところにばかり重きを置いてしまっていた。もう一度リコーダーの手法に目を向けて授業を整理したいと思う。

４　指導・助言等

（1）北山　敦康　先生（国立大学法人静岡大学名誉教授）
生徒の前で、音楽の本質を見極めようという考えの基、授業していた。自分がやるとうまくいかないが、人に見せてもらうと、いろいろな話題が出てくるものである。
今回の研究主題についてはイの（イ）である。リコーダーについては無意識的な体験はあるが、意識をもって演奏させることで、学びの本質を狙おうとしていた。音の表情を授業の中で取り上げようとしていた。タンギングもビブラートも、着目すべき点は奏法よりも、奏法から生まれる音色なのではないか。
タンギングのＴ・Ｄ・Ｒは、単純化しているようで学びを難しくしている。タンギングをしないというタンギングもある。機能と音色、音域によってタンギングを使い分けているので、逆に単純化することで難しくなるのではないかと思う。

音楽のイメージとして、タンギングやビブラートを“しない”ところを大事にしてほしい。装飾的な扱いの部分はタンギングをしない。ビブラートもすべての音にしているわけではない。そこから緊張と弛緩のイメージが見られたのではないか。生徒の発言を取り上げると、「半音の・・・」という発言から、半音がある部分でビブラートを作らず、緊張と弛緩が生まれることにつなげることができる。ビブラートをすることからではなく、しないことから広がりが始まる。単純化してしまうことで難しくなることもある。

授業案を綿密に作るほど、授業はそこから外れるものである。それは生徒の発言によって外れていくが、それをどう生かすかがより面白い授業を作る秘訣となる。

（2）島田　聡　先生（群馬県教育委員会高校教育課指導主事）

新高等学校学習指導要領「音楽Ⅰ」における、本時の学習に係る内容とその解説を確認していただきたい。特に、イの「知識」については、〔共通事項〕と関わらせた指導により、感受したことと曲想との関わりを自分自身で捉えていく過程が必要であること、また、ウの「技能」については、イに示す「知識」に関する学習内容と関わらせることを重視していること。その上で、アの「思考力・判断力・表現力等」については、新たな知識や技能の習得は、創意工夫の過程で行われるものであることから、あらかじめ必要な知識や技能を習得してから創意工夫をするといったような一方向のみの指導にならないよう留意することで、曲にふさわしい奏法や技能を身に付けることに生徒が必要性を感じられるようにすることなどである。

本時では、楽曲を再聴取し、奏法について気付いたことや工夫したい点を意見交換する学習があった。この時、青柳先生は「タンギングを工夫するだけで、この曲らしさがでるかな？」「タンギングは音の発音についての奏法だよね。では、音が伸びている間は、どんな風に演奏されているかな？」と生徒に投げかけた。この投げかけによって、生徒に思考を促すと同時に、その思考を焦点化させていった点で、非常に効果的に働いていた。１点、改善点を挙げるならば、「この曲らしさ」と言ったときに、生徒がそれまでに発表・共有していた「暗く冷たい印象」「一人で泣いているよう」などの感受の内容と関連付けてあげることで、〔共通事項〕アに関する学習が支えとなった指導になったのではないかと考える。

また、先ほど授業者から「（指導案に書いてある）８小節までいかなかった」という授業説明があった。しかし、難しい楽曲を演奏することや楽曲全てを演奏できるようにすることが重要ではなく、本時の学習目標を達成するためにふさわしい部分に焦点化することが重要であり、解説にある「技能の習得に関する学習を創意工夫の過程に位置付ける」という内容をしっかり実現していた。ただし、「生徒が必要性を感じながら」という点では、やや授業者の思いが先行する形となってしまっていたため、どうすることで生徒が技能を身に付ける必要性を感じられたかについて、先生方御自身でお考えいただき、今後の授業改善としていただきたい。

（3）大熊　信彦　先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会長）

「生涯にわたり学びに向かう力や意欲を高める」観点では、各活動のねらいが明確であり、安心して取り組む生徒の姿が見られた。その結果、リコーダーをもっと吹きたいと思わせる姿があった。「音楽的な見方・考え方を働かせる」ことについては、音楽をイメージや感情と結びつけることはできていたが、音楽の歴史的・文化的背景に迫ることも必要である。当時の生活や文化と音楽との関わりが、高校段階ではさらに必要になってくる。「創意工夫、知識・技能」の観点では、音の立ち上がりやつながり方であるタンギング、伸ばした音の表情であるビブラートを学習対象にしていたが、後者は今後の実践的な研究課題にしたい。

第１回の利根商の授業、今回の授業ともに、教材や授業展開を音楽部会全体で共有化していくことが大事になっていく。各学校での授業にぜひ生かしてほしい。

（4）授業者より補足等

いろいろなやり方を生徒と一緒に探っていきたいという思いで授業を行った。その授業を共有できたことがありがたく感じる。北山先生や島田先生の話からあった、ビブラートをしないということや想定していない生徒の発言や演奏によって授業が面白くなると感じた。

5　参加者（敬称略　順不同）

大熊　信彦（太田女子）	島田　　聡（高校教育課）	須田　諭美（吉井）	青柳　　亮（桐生女子）
小川　唯佳（利根商業）	大小原美幸（高高特支）	黒岩　伸枝（高崎）	橋詰　詩織（太田女子）
野口　瑞穂（大間々）	鈴木香奈子（桐生南）	松平　康子（尾瀬）	勝山　英城（前橋商業）
五十嵐桃子（長野原）	近野　裕子（伊勢崎清明）	前島　律子（館林）	木部　　誠（太田フレ）
引田　麻里（市立太田）	金田　英樹（前橋女子）	川上　寛子（伊勢崎）	兒玉　理紗（高崎女子）
柳田絵美子（館高特支）	田中ちひろ（高高特支）	住谷　　伴（高崎特支）	伴野　和章（県教委）
坂本　　将（県教委）			

文責：引田　麻里（市立太田）

芸術科「音楽Ⅰ」　学習指導案

日　時：令和２年１月２２日（水）２校時
対　象：普通科１年１組音楽選択者２０名
授業者：群馬県立桐生女子高等学校
　　教諭　青柳　亮
場　所：音楽室

Ⅰ　主　　題　題材名「リコーダーの響きを味わおう」

１　考　　察

（１）題材観

本題材は、新高等学校学習指導要領芸術科「音楽Ⅰ」Ａ 表現（２）器楽より

ア　　器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫すること。

イ（イ）曲想と楽器の音色や奏法とのかかわり
　（ウ）様々な表現形態による器楽表現の特徴

ウ（ア）曲にふさわしい奏法、身体の使い方などの技能
　（イ）他者との調和を意識して演奏する技能
　（ウ）表現形態の特徴を生かして演奏する技能

を指導するものである。

本題材は、リコーダーの器楽表現を通じて、楽器に親しみ、旋律の美しさを味わいながら、リコーダーの音色や奏法の特徴を理解し、独奏表現や合奏表現の多様性を追求していくことをねらいとする。

リコーダーは、大部分の生徒にとって小学校や中学校の音楽科において既習の楽器であるが、楽曲の曲想とかかわらせながら、楽器の持つ音色の特質やその奏法、曲にふさわしい表現方法等について深く追究したと実感している生徒は少ない様子である。本題材における教材「涙のパヴァーヌ」のようなリコーダー独奏曲の鑑賞や演奏を通じて、リコーダーがもつ魅力や面白さについて考えることにより、音楽文化や表現の幅広い可能性について関心を持ち、様々な楽曲やそれぞれの演奏表現の良さを味わおうとする態度を育むことにもつながると考える。

（２）生徒の実態

ア　知識及び技能

リコーダーの運指や既習曲を覚えている生徒は多いが、楽曲にふさわしい息づかいやタンギング奏法等について優れた表現技能をもっている生徒は少ない。

イ　思考力、判断力、表現力

歌曲の鑑賞では、それぞれの歌手の声質の違いや表現方法の特徴などを聞き分けたり感じ取ったりすることは大半の生徒ができており、歌唱においては自分が表現したいイメージを

もって歌唱できる生徒も少なくない。音楽を形づくっている要素を知覚し、感受した雰囲気を文章で表現したりする能力に関しては、情緒豊かな表現ができる生徒もいる。

ウ　主体的に学習に取り組む態度

静かに音楽に耳を傾けている姿が多く見受けられ、ペアやグループ学習などでは積極的に仲間同士で教えあったり一緒に考えたりするなど、主体的に学習に取り組もうとする意欲は高い。一方で、自己のイメージをもったり自分の意見を発表したりすることに自信をもてないような生徒も見受けられる。本題材の器楽表現を通じて成功体験を積み、より積極的に学びに向かう姿勢を養いたい。

（３）教材について

題材では、「フレールジャック」（フランス民謡　編曲：佐藤麻耶）、「涙のパヴァーヌ」（作曲：ヤコブ・ファン・エイク）の第１主題の冒頭部分、「空と大地」（ドイツ民謡）を主な教材として扱う。

「フレールジャック」は、日本でも手遊び歌として親しまれているフランス民謡である。元気の良い、弾むような旋律をもつ楽曲で、曲想を捉えやすく、タンギングを工夫した演奏にふさわしいと考える。

「涙のパヴァーヌ」は、エイクが１７世紀に作曲した「リコーダーのための無伴奏曲集“笛の楽園”」に収められているソプラノリコーダーのための変奏曲の１つであり、本題材ではその変奏曲のテーマ冒頭部分を扱う。「フレールジャック」において既習の音が多いため運指が比較的容易であり、リコーダーの一般的な奏法としてのビブラートを習得しやすい長い音符が多いため、リコーダーの独奏表現の美しさを追究しやすい楽曲であると考える。

「空と大地」は、のびやかで美しい旋律をもつドイツ民謡で、ビブラート奏法を生かした表現をしたり、３度音程の和声感（テクスチュア）を知覚・感受したりしやすい楽曲であると考える。

２　題材の指導目標

リコーダーの音色や奏法の特徴を理解し、他者との調和を意識しながら、表現形態の特徴を生かして、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫する。

３　題材の評価規準

知識・技能	知①曲想とリコーダーの音色や奏法との関わり、様々な表現形態による器楽表現の特徴について理解している。 技①リコーダーの奏法や身体の使い方、他者との調和を意識して、様々な表現形態の特徴を生かした演奏をする技能を身に付けている。
思考・判断・表現	①リコーダーのタンギングや息の入れ方、ビブラートによる音色や旋律などを知覚し、それらの働きが生み出す特質な雰囲気などを感受している。 ②知覚したことと感受したことのかかわりについて考え、自己のイメージをもってリコーダーの演奏を創意工夫している。

	③テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受して、リコーダーのアンサンブルを創意工夫している。
主体的に学習に取り組む態度	①音や音楽、音楽文化と豊かにかかわり、主体的・協働的に表現の学習活動に取り組もうとしている。

※　本題材では、新学習指導要領に基づき３観点での評価規準の設定と評価を試行する。

４　指導方針

第１次では「フレールジャック」を扱い、リコーダーの種類や音色の特徴、運指およびタンギングについての理解を深め、リコーダーに親しみながら楽曲にふさわしいタンギングの奏法の習得につなげる。

第２次では「涙のパヴァーヌ」を扱う。第１次で扱ったタンギング奏法についての理解を活用し、意見交換や演奏活動を通じてビブラート奏法を習得し、生徒の気づきを軸にしながら曲想と音色や奏法とのかかわりを意識した演奏につなげていく。

第３次では「フレールジャック」および「空と大地」を扱い、第２次で学習した曲想と音色や奏法とのかかわりを意識した演奏を創意工夫して行う。また、カノン形式での合奏を行い、楽曲の和声感「テクスチュア」の働きを感受し、他者との調和を意識して演奏を創意工夫することに重点を置く。

５　指導と評価の計画

時間	学習目標	学習活動	評価規準及び【評価方法】
第１次 ２時間	リコーダーに親しみ、「フレールジャック」にふさわしいタンギング奏法を身に付ける。	○「フレールジャック」を演奏し、リコーダーに親しむとともに、ソプラノリコーダーとアルトリコーダーの音色の特徴を感じ取る。 ○様々なリコーダーの種類、形状、音色について理解する。 ○タンギングの種類について考える。 ○タンギングを工夫して「フレールジャック」を演奏する。	主①【ＷＳ】 【観察】 思①【ＷＳ】
第２次 ３時間	「涙のパヴァーヌ」にふさわしい奏法、身体の使い方などを身に付け、自己のイメージをもって演奏する。	○「涙のパヴァーヌ」を鑑賞し、楽曲の印象についてワークシートに記入し、グループで共有する。また、演奏面で気づいた点についても記入する。 ○タンギングを工夫して「涙のパヴァーヌ」の冒頭４小節を演奏する。 ○音の高低による息の入れ方、ビブラート奏法について考える。 ○息の使い方を工夫して「涙のパヴァーヌ」の冒頭８小節を演奏する。	主①【ＷＳ】 【観察】 思①【ＷＳ】 【観察】 思②【ＷＳ】

		○ビブラートをかけるべき音について考える。 ○グループ内で「涙のパヴァーヌ」の冒頭８小節を発表し合い、奏法と音色について気づいたことをワークシートに記入する。 ○様々な演奏形態による「涙のパヴァーヌ」を聴取し、楽曲のよさや美しさを味わうとともに、自己のイメージを豊かにもつ。 ○自己のイメージをもって「涙のパヴァーヌ」の１６小節を演奏する。	【観察】 技①【演奏】
第３次 ２時間	「フレールジャック」と「空と大地」にふさわしい奏法を工夫して演奏する。	○タンギングや息の使い方などを工夫して「フレールジャック」を独奏する。 ○「空と大地」を鑑賞し、演奏面で気づいた点についてワークシートに記入する。 ○奏法を工夫して「空と大地」を独奏する。 ○独奏表現と、カノン形式による合奏表現における奏法の違いや工夫点などについてグループで話し合う。 ○グループで「フレールジャック」「空と大地」をカノン形式で合奏する。	 思②【ＷＳ】 主①【観察】 知①思③ 【ＷＳ】 技①【演奏】

Ⅱ　本時の学習指導

１　主　　題

リコーダーのタンギングやビブラート奏法を工夫しよう（第３時／全７時間）

２　目　　標

リコーダーのタンギングや息の入れ方、ビブラートによる音色や旋律などを知覚し、それらの働きを感受して、奏法を工夫して「涙のパヴァーヌ」を演奏する。

３　本時の評価規準

思考・判断・表現	①リコーダーのタンギングや息の入れ方、ビブラートによる音色や旋律などを知覚し、それらの働きが生み出す特質な雰囲気などを感受している。
主体的に学習に取り組む態度	①音や音楽、音楽文化と豊かにかかわり、主体的・協働的に表現の学習活動に取り組もうとしている。

４　指導方針

第１次で扱ったタンギング奏法についての理解を活用し、楽曲の鑑賞、意見交換や演奏活動を通じて、生徒の気づきを軸にしながら曲想と音色や奏法とのかかわりを意識した演奏につなげていく。

５　使用教材・機器

リコーダー、ワークシート、「涙のパヴァーヌ」のＣＤ

６　展　　開

時間	学習内容	学習活動	支援及び指導上の留意点	評価規準及び【評価方法】
導入５分	○前時までの復習と本時の内容の共有をする。	○「フレールジャック」をカノン形式で演奏する。		
展開30分	○「涙のパヴァーヌ」にふさわしい奏法を知覚し、奏法が生み出す雰囲気を感受する。	○「涙のパヴァーヌ」を鑑賞し、本時で扱う楽曲について見通しをもつ。 ○楽曲の印象・演奏面で気づいた点についてワークシートに記入し、グループで共有する。 ○どのようなタンギングで楽曲を演奏したらよいのかを考え、奏法を工夫して「涙のパヴァーヌ」の冒頭４小節を演奏する。 ○再度楽曲を鑑賞し、「奏法」で気づいたことや工夫したい点について意見交換をする。	・「雰囲気」や「リコーダーの音質」に留意しながら聴くように促す。 ・前時に扱ったタンギングの種類に着目するよう促す。 ・タンギングの工夫だけで楽曲にふさわしい演奏になるかどうかを考えながら聴くように促す。	主①【ＷＳ】【観察】 思①【ＷＳ】【観察】

		○息の入れ方、ビブラート奏法について考え、ビブラート奏法の練習をする。 ○ビブラートをかけるべき音について考え、楽譜に印を記入する。 ○息の入れ方やビブラート奏法を工夫して「涙のパヴァーヌ」の冒頭８小節を演奏する。	・生徒間で互いに演奏を聴きあう機会を設定し、ビブラートのかけ方について工夫している点を伝え合えるようにする。 ・すべての音にビブラートをかけるとどのような演奏になるか教員が実践して聴かせ、ビブラートの適切な用い方について考えられるようにする。	
まとめ15分	○曲想と楽器の奏法とのかかわりを意識して「涙のパヴァーヌ」を演奏する。	○グループ内で「涙のパヴァーヌ」の冒頭８小節を演奏発表し合い、奏法と雰囲気について気づいたことをワークシートに記入する。	・共有したことをふまえ、最後にもう一度演奏で表現し、次時の学習へとつなげる。	